



[令和 3 年 12 月 8 日 定例会発表要旨]

JR北海道札幌運転所のあゆみ

北海道旅客鉄道株式会社 札幌運転所 副所長 敷村朝生氏

1880（明治 13）年、北海道初の鉄道「官営幌内鉄道」が開通して 141 年、鉄道は北海道開拓の歴史であり、北海道の開発と道民の皆さまの暮らしとともに歩んできました。札幌運転所（手稲区曙 1 条 3 丁目）が開設されたのは 1965（昭和 40）年と、鉄道の歴史の中ではまだ浅いのですが、札幌運転所の 56 年の歴史は、北海道の鉄道近代化と鉄道輸送の変遷を象徴しているとも言えます。



1. 札幌運転所の概要

札幌運転所は、北海道の最大都市札幌を中心とする旅客列車の主要車両基地として「列車の運転」と「車両の整備」という輸送の第一線業務を担当しています。

現在社員数は約 340 名、車両数 462 両の規模であり、札幌圏を中心に北海道全輸送力の 70% を占める、JR 北海道随一の規模を誇る車両基地に発展しています。



札幌運転区 開区時全景

2. 札幌運転所 56 年のあゆみ

① 札幌運転区の誕生と鉄道輸送の近代化（1965-1986）

昭和 30 年代後半の高度成長期に入ると、道内主要幹線は、札幌を拠点に旭川・函館・室蘭・釧路の主要都市や観光地へのアクセスを中心に、着実な伸びを示していました。そこで、当時の日本国有鉄道（国鉄）は、旅客車を札幌に総合配置すること及び将来の電車基地の位置づけとして、1965（昭和 40）年 9 月、手稲地区に「札幌運転区」を開設することになりました。

開区当時の札幌運転区は職員数 133 名、車両数 62 両の規模でスタートし、約一カ月の準備期間を経て同年 10 月、初列車である上り急行『第 2 すずらん』を出区させ、正式に営業を開始しました。

その後、1967（昭和 42）年に函館本線小樽～旭川間、1980（昭和 55）年には千歳線・室蘭本線白石～室蘭間の電化開業に合わせて、運転区の規模も順次拡張され、ほぼ現在の規模になりました。この頃には蒸気機関車が姿を消し、鉄道の主役は電車と気動車に変わっていきます。

② JR 発足～北海道鉄道輸送の中核基地へ（1987-1998）

1987（昭和 62）年、国鉄は 115 年の長き歴史に幕を下ろし、札幌運転区は「北海道旅客鉄道株式会社（JR 北海道）札幌運転所」として事業を継承し、新たなスタートを切りました。

翌 1988（昭和 63）年には、「青函トンネル」が開通。札幌と上野を結ぶブルートレイン 寝台特急『北斗星』が運行を開始するとともに、札幌駅周辺立体交差事業も完成しています。高架となった



急行「第 2 すずらん」出発式



JR 北海道 発足

新しい札幌・桑園・琴似各駅の誕生と同時に札幌圏の輸送力も大幅に増強され、札幌運転所は質的にも量的にも北海道鉄道輸送の「心臓部」と呼べる、重要な役割を有する職場となりました。

その後も 1990（平成 2）年以降、旭川・函館・釧路方面に新型特急車両を投入し、都市間輸送の高速化を図るなど、車両技術の拠点という使命も果たしてきました。

③ 多様に展開する鉄道技術と自然災害への対応（1999-2007）

1999（平成 11）年、お客様の多様なニーズに応えるため、新たなスタイルのリゾート列車として「お座敷列車」がデビュー、また『北斗星』に変わる次世代列車として 豪華寝台特急『カシオペア』も札幌運転所に到着しました。お客様の利便性を第一に、さまざまなサービスと最新のシステムを導入した車両が続々と投入されるなか、当所社員も研究や研鑽を重ね、万全の体制を整えて日々のメンテナンスに取り組みました。

2000（平成 12）年 3 月に有珠山が噴火、室蘭線の一部区間の列車運転が約三カ月の間 中止となりました。札幌運転所でも 列車及び乗務員の運用変更や、函館本線（小樽・倶知安）経由の迂回運転計画の策定など、現場第一線での対応で中心的役割を担いました。

④ 確かな技術と安全で鉄道の未来を築く（2008-2021）

2008（平成 20）年には、通勤列車の主力となる 735 系を新製。2012（平成 24）年、学園都市線の電化に合わせて 733 系が運用を開始し、札幌運転所の配置車両数もさらに増えていきました。

2011（平成 23）年、特急『スーパーおおぞら』14 号が、石勝線のトンネル内で列車脱線火災事故を起こしてしまいました。多くのお客様が負傷される重大事故となった原因の一つに、車両整備の問題も挙げられました。「すべてはお客様の安全のために」— 事故から 10 年経った現在も私たち

は、列車の安全の確保とさらなる技術向上のため、全社を挙げ、社員一丸となって取り組んでいます。

2016（平成 28）年、ついに新幹線が津軽海峡を渡り、新函館北斗に至る『北海道新幹線』が開業しました。そして、2030（令和 12）年には札幌まで延伸される計画で、工事が進められています。

札幌運転所は ここ手稲の地で、地域の皆さまとともに北海道の鉄道輸送を支える、JR 北海道輸送部門の「核」としての役割をこれからも担っていきます。



キハ 183 系「お座敷列車」



北海道新幹線「H5系」



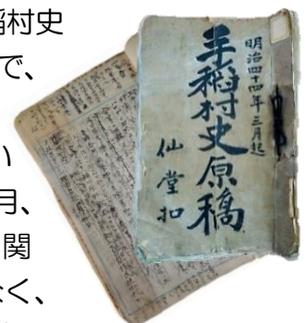
札幌運転所 全景（現在）

遺構・遺物は語る

刊行をみなかった(?)「手稲村史」

手稲記念館（西区西町南 21）の所蔵品に、『明治四十四年三月起 手稲村史 原稿 仙堂扣ひかえ』があります。手稲村役場の郵紙約 100 枚に書かれたもので、追記や訂正の跡が欄外にまでびっしりと残り、編者の苦勞が偲ばれます。

編纂の経緯は定かではありませんが、地勢、沿革、産業、教育などに続いて「前田農場」の詳細が綴られていることから、明治 44（1911）年 8 月、東宮（のちの大正天皇）が北海道行啓の際に 同農場を視察されたことと関係するのでしょうか。「手稲村史」がその後刊行されたという記録はなく、献上のための草稿だったのかもしれないと、勝手に思いを巡らせています。[J]



手稲村史原稿

▶ 町制への移行

昭和 9 (1934) 年、札幌国道の改良工事が完成し、札幌・小樽間の省営バスの運行が始まります。手稲村でも 軽川市街の道路が拡幅されるなど、基盤整備はさらに進んでいきました。「軽川駅」(のちに「手稲駅」と改称)も 同 9 (1934) 年 2 月に駅舎が落成しています。

昭和 17 (1942) 年、琴似村との境界が変更され、現在の「旧中の川」(当時の呼称は「炭鉱排水」)以西の地区が手稲村に編入されます。このとき、上手稲村・下手稲村・山口村の大字名を廃止し、福井・平和・西野・東・宮ノ沢・富丘・軽川・前田・金山・稲穂・星置・山口の新たな字名を定めました。

町制への移行は 昭和 26 (1951) 年。開村 80 年を機に、政治・経済・教育・文化面での拡充を図りたいと、北海道



昭和 40 年撮影
旧陸軍無線所の建物を活用した手稲町役場
(札幌市手稲記念館 所蔵)

議会の承認を得て 同年 11 月 1 日に「手稲町」となりました。町名を巡っては「手稲よりも軽川のほうが 知名度が高いとする意見もあったが、みんな手稲山の見えるところに住んでいるのだからということで手稲町になった」と、当時の町議会議員は語っています。

移行後は産業振興にとくに力を入れ、昭和 30 年代半ばからは、軽工業地帯、住宅地として周辺地域からも注目されていきます。人口も 昭和 41 (1966) 年には、30,000 人に達しました。



昭和 9 年撮影
軽川駅 駅舎落成
(札幌市手稲記念館 所蔵)

▶ 札幌市との合併

急速に都市化が進む中で、手稲町では上下水道など基盤整備にかかる諸問題が生じていきました。一方、オリンピック招致を目指していた札幌市は競技会場として手稲町に関心を向けるようになります。

昭和 36 (1961) 年、隣接町村との合併について議会で問われた札幌市長は「手稲町を市の工業地帯とすることが考えられる」と答え、手稲町長も 昭和 38 (1963) 年 の町政執行方針の中で「工業地帯が完成するには札幌市



昭和 47 年撮影
冬季オリンピック ボブスレー競技場
(札幌市公文書館 所蔵)

との合併が早道であり、町民も原則として賛成している」という見解を示します。

昭和 41 (1966) 年 4 月、冬季オリンピックの札幌開催が決定したことをきっかけに 合併の動きは一気に進み、翌 42 (1967) 年 3 月、手稲町はその歴史に幕を下ろして 札幌市となりました。

昭和 47 (1972) 年 2 月、『冬季オリンピック札幌大会』が開催され、スキーの回転競技や ボブスレー、リュージュの会場となった手稲山は、世界にその名を知られるようになります。



昭和 42 年撮影
札幌市・手稲町合併記念式典
(札幌市公文書館 所蔵)

▶ そして手稲区に…

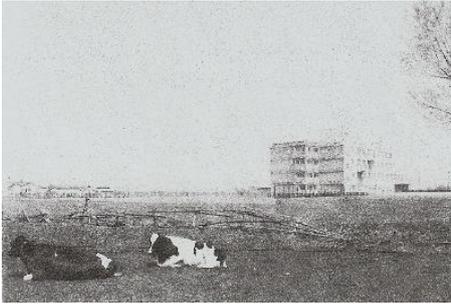
昭和 47 (1972) 年 4 月、札幌市の“政令指定都市”移行に伴い、旧手稲町は西区の一部になりました。その後、市は人口増加が著しい行政区域の再編に着手し始め、平成元 (1989) 年 11 月 6 日、「手稲区」が誕生します。令和 3 (2021) 年 12 月 1 日現在、61,807 世帯、人口 142,708 人が住む街となりました。

[編責：広報部]

* 参考文献：札幌市『手稲町誌』、同『新札幌市史』、札幌市教育委員会『さっぽろ文庫 1～札幌地名考』、札幌市手稲区『手稲でみつけた手稲のはなし』、手稲郷土史研究会『史料に見る手稲今昔～手稲歴史年表』、ほか。手稲区役所 1 階の「手稲歴史資料展示コーナー」に現在掲示中のパネルも併せてご覧ください。

◆ なつかし写真帖

開校時の前田小学校付近



昭和 53 年 5 月 前田小学校付近

この写真は昭和 53 年 5 月に撮影したもので、開校したばかりの前田小学校と近くにあった馬場牧場が写っています。学校の周辺には建物らしいものが見えません。

昭和 40 年に開校した手稲鉄北小学校は児童数が増え、同 50 年に分家した手稲山口小学校へ子どもたちが移っていきました。その後あっという間に市内一のマンモス校になり、同 53 年には前田小学校と富丘小学校が同時に分離独立したのです。

人口増が著しい札幌市は、この年に小学校を 8 校も新設したのでした。さらに、中学校 1 校と幼稚園 1 園と今までに前例がない校数でした。大変な財政支出だったことでしょう。

前田小学校は昭和 53 年に 17 学級でのスタートでしたが、児童増に追いつけず、3 年連続で増築を重ね 同 56 年に完成したのです。毎年教室が足りず特別教室（音楽室や図工室・家庭科室・理科室など）を普通教室に転用して子どもたちを収容しました。それでも足りずグラウンドの端にプレハブ教室を設置し、寒暖をしのぐ環境に耐えねばなりませんでした。それを乗り越えた子どもたちは、11 月頃に完成した新しい教室に移る喜びは大きいものでありました。増築工事のドリルの騒音は「ギーギー」「ガリガリ」の連続、学習中の子どもたちに多大の迷惑を及ぼしていました。

そんな前田小学校も 35 学級という大きな学校になり、前田中央小学校へ分家したのは昭和 62 年でした。今は 12 学級と特別支援学級を備える小さな学校になっています。

前田小学校が立つこの土地は、旧加賀藩ゆかりの前田農場の小作人であった川上家の作二さんが、14 歳の時に人夫を頼んで その人と一緒に朝から晩まで手にマメを作りながら、鍬で耕した土地だそうです。愛着ひとしお、「この土地を学校に売ってくれ」と言われたとき、「子どもと別れるよりも辛かった」と話してくれたことが思い出されます。

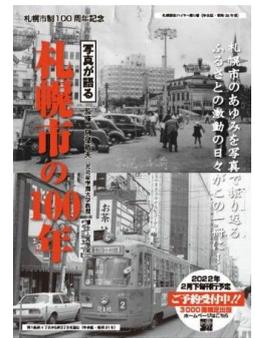
牛が寝そべっている辺りに札幌から伸びてきた下手稲通が開通、学校前の石狩手稲線が片側 2 車線の道路に改良されました。この写真は、その交差点あたりから撮ったものでしょうか。新しい道路に沿って大型店舗が次から次へと建ち並び、住宅で埋め尽くされていったのです。

※前田小学校開校 30 周年記念誌『前田ものがたり』を参照しました。

永井道允（手稲郷土史研究会 会長）



★写真集の編集に協力しました 日本各地の写真集や郷土史関連の書籍を刊行する いき出版（新潟県長岡市南七日町 81 ☎0258-89-6555）では、2 月下旬、『写真が語る 札幌市の 100 年』を発売の予定です。これは、令和 4 年に市制 100 年を迎える札幌のあゆみを写真で振り返ろうというもので、街並や生活の風景などが おもに個人所蔵のオリジナル写真によって紹介されています。このたび 制作担当より手稲郷土史研究会へ問い合わせがあり、会報『郷土史ていね』に近年掲載した写真 ※もとの所有者の了解済み を提供したところ、複数枚の採用が決定したとの連絡がありましたので、ご報告します。A4 判上製本、280 ページ、収録写真約 600 枚、定価 9,990 円。市内大型書店などで予約受付中。



表紙イメージ
(いき出版ホームページより)

次回定例会 ⇒ 発表内容「手稲墓地に眠る思い出の人びと」ーノ宮博昭（手稲郷土史研究会 会員）／
令和 4 年 2 月 9 日（水）13：30～／手稲コミュニティセンター 1 階 多目的室 ※会場が従来と異なります。ご注意ください！

手稲郷土史研究会会報「郷土史ていね」第 167 号 令和 4 年 1 月 12 日発行 発行責任者：永井道允（手稲郷土史研究会 会長） 編集：菅原純子・佐々木光男
❖〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 3 丁目 札幌エルプラザ 2 階 札幌市市民活動サポートセンター レターケース No. 277 手稲郷土史研究会
❖メールアドレス kyoudoshi_teine2005@yahoo.co.jp ❖TEL 090-3381-4994 <担当：林>